

財団法人日本社会福祉弘済会助成事業

第29号  
Vol.10-2  
2013年9月1日

# Dari Kuching

## アジア地域福祉と交流の会(Asia Community Service & Exchange)広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人靖泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Jalan Hose Lane, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 E-mail: [info@acejps.com](mailto:info@acejps.com) ; [kerkn@tmn.net.my](mailto:kerkn@tmn.net.my)

普段は緑葉の街路樹に年に1度、花(ブンガイ・カユ)が咲く

撮影者 中澤 和代

トニー・フェルナンデス49歳。彼の手が日本にも及ばないものかと、私は密かに待っていた。彼は日本に目をつけるに違いない。日本では、あまり知られていないが、彼はマレーシアでは有名だ。格安航空券のアジアでの草分け、エア・アジアの社長。

多額の負債をもつ会社を引受け立て直ちに成功。日本就航は、羽田、次いで関空だった。2010年末初物好きの妻は、往復3万円余のチケットを手に入れて帰国した。

エア・アジアは、何故成功したか。経営合理化だけではない彼の信念があった。それは、この広い空を“限られた人だけの空でなくみんなの空にしたい。誰でも利用出来る料金にしたい”顧客の願いを経営の基本とし、不要な贅沢を排した。バスで7時間のところと同じくらいの料分で1時間で行きたいという願いの実現への挑戦。為せば成るの謎通り、彼は為したのである。今や航路は世界の各地に広がりを見せている。

彼は言う。「待っていても何も始まらない。若ものらしいパワーとアイディアで乗り越えれば、必ず可能性が開ける。」

子どもの頃、医師であった彼の父は、貧しい患者の家に往診して無料で診療し、差し出す農作物も患者の大事な栄養源だからと受け取らなかったという。それを見て育った彼は、貧しい、声の弱い人たちの味方になりたいと思った。そこから彼の目線の確かさと柔軟なアイディアが生まれた。(健)

## 障がいのある人も働けるパン屋さんをめざして

橋本享子

(クアラルンプール在住)



夢見を現実にするためにパンづくりを学ぶ

私は、マレーシアで国際結婚をして、自閉症の息子がおります。中澤先生とのご縁は、息子がお世話になっている学園の、元園長先生からのご紹介で知り合うことができ、今でも大変お世話になっております。

息子が誕生したその当時は、マレーシアでは障がい者への理解が今よりも更に乏しく、家族みんなが、本当に大変な時期を、毎日必死で過ごした経験があります。そんな中、私はここ10年、色々なNGOでボランティアを経験し、多くの方達との出会いも出来て、ネットワークが広がり、障がい者の親として何か役に立てる事はないかと考え続けてきました。

以前、日本に帰国中、あるベーカリーの会社と運送会社が、障がい者の働けるベーカリーカフェを立ち上げていることを知り、私も見学に行きました。そこには、障がい者がパンを作ってる姿、カフェでは、障がい者がウエイトレスをしてる姿を見て感動しました。こんなコンセプトがマレーシアにも有れば、どんなにいい事か!

この事をきっかけに、パン作りに興味を持ち、転勤でいらした日

同じ試みができないものかと模索し手探りながらも、2010年にNGO アマルスリア (マレーシア語で太陽と言う意味です。社会の影になりがちな障がい者の存在を、もっと堂々と、太陽のように明るく、社会に溶け込んで欲しいと言う願いが込められております。)を立ち上げました。目標は、地域社会の中で、障がい者もそうでない人も、一緒に明るく働ける場所を作ることです。

マレーシアでは、18才以上の障がい者は、行き場も少なく、家に閉じこもる事が殆んどなのです。彼らが成人になってからの長い人生を、働く喜びを得られる場として、日本のようなベーカリーカフェを何とかして造りあげたかったのです。現在は、2010年から日本人会のカフェに週一回自宅でパンを作り納品しています。又、毎週土曜日に障がい者と一緒にパン作りもしています。しかし、自宅からではなかなか次へのステップに発展出来ず、何度も諦めかけましたが、周りの応援、ボランティアの方々からの支えを頂き、障がい者の将来を思うと、やはり、頑張

本人の講師から何度か学び又、MIBという短期コースに通ったりと、何とかしてマレーシアでも

らなくてはと続けております。

その後、聴覚障害者センターの方達ともご縁が出来、共同でベーカリープロジェクトを運営することになりました。そして、マレーシアで大変人気のあるパン屋さん、フィッセルとルバン始め、4



共に学ぶ仲間の絆も強く

店舗を担当なさってる、日本人マスターシェフの新井様とご縁が有り、お店の社長の許可もいただき、今年

の5月から、聴覚障害のある方達と共に、私も研修に通わせて頂いております。まだ、始まったばかりのプロジェクトですが、パン作りに必要な技術は、勿論お店を開店する為のマネージメントや知識等など、細かき処まで一つ一つわかり易く、丁寧に指導くださり、私達も美味しいパンが作れる様に日々努力しています。

障がい者の仕事としては、一人一人が自分の出来ることを最大限に活かし、少しずつでも新しい事に挑戦することができたら良いと願っております。資金面では、後ろ盾も無く、心細く不安であり、色々な難題は山積みですが、マレーシアの美味しいパン屋さんからご指導いただいている事が今は何よりの励みになっています。

近い将来、障がいのある人と障がいのない人が共に手を取り合って、やりがいのある仕事出来る日を夢に描きながら、人と人との絆が障がい者にとって将来の自立と自活につながる様に願い力を尽くして行きたいと思っています。

# サラワク大好き! (Aku rindu ka Sarawak!)

神林 ゆかり

今、13回目のマレーシアのボルネオでこれを書いています。

またまた帰ってきました。一言でいうとマレーシアは私の二番目の母国、帰れる場所です。マレーシアに魅了されている私がマレーシアの地に初めてきたのは2007年3月でした。“マレーシアへ行きたい!”と生きてきたのではありませんでした。大学四年生の時に海外の福祉について、研究したいと思ひゼミの先生に中澤健さんを紹介していただいたことがきっかけでした。先生は海外で活動している知人を三人紹介してくださいましたが、そこから中澤健さんの活動を強く推薦してくださいましたこと、中澤夫妻と出会ったこと、サラワクの地に足を踏み入れたこと、イバンの人々と出会ったことは、今となっては私の人生を変える、そして決めることとなりました。

2007年3月を初めにクチンでの学生期間も含めサラワクへ13回訪問し、延べ443日間生活しました。私のパスポートはマレーシアとサラワクのイミグレーションスタンプで埋め尽くされています。こんなにもサラワクにこだわるのは言うまでもなく、「サラワクが好き!」だからです。私をこんなにもサラワクのことを好きにさせたのはやはり一番初めの2007年3月のイバン族との出会いです。日本から来た私たちをゲストとして最高のおもてなしと伝統で歓迎しながら、言葉が通じなくても家族のように接してくれる彼らと過ごすことに居心地が

よくなってしまいました。また、ジャングルの中のロングハウスに住み、近くにはお店がなく、電気も通っておらず、決して便利とは言えない生活環境で協力し合って生活しているイバン族の生活が私にフィットしたのでしょうか。この体験をきっかけに、日常生活はもちろん、一週り年間行事をイバン族と一緒に過ごしてみたくなりました。年間最大行事の「ガワイ」をはじめ、ワークキャンプ、「年越し」・・・と2007年は幾度もサラワクを訪れ、イバン族のように過ごしました。イバンの伝統行事や、セレモニーの度にダンスをし



かわいいニコラスさんとママ

たり歌をうったり、といった賑やかで盛大なパーティーは常に私を興奮させましたが、日常、廊下でみんなでおしゃべりし、大笑いすること、廊下で子どもと遊ぶこと、サロンを巻いて川で水浴びをすること、日本にはあまりない人と人とのコミュニケーションが私にはとても新鮮であり、とても心地よく感じました。1年間サラワクに通い、「もっとサラワクに居たい、もっとみんなと会話が出来るとなりたい」という思いから2008年、クチンの学校へ入学し

ました。約一年間暮らしたクチンも、今ではいつでも私が帰れるところ。車がないと出かけられなかったり、タクシーを呼んでも来なかったり、時には、タクシーで高額な運賃を請求されたり、歩いていると、突然の雷雨で長時間の雨宿りをしなければならなかったり・・・、いろいろありますが、そんな時でも、せかせかせずに「まあ、いっか」という気持ちで快適に過ごせる場所です。だからこそ、今も好きで、いつでも来たいと思うのでしょ。サラワクと出会って7年、今、私は自分の息子を連れてサラワクを訪れるようになり

ました。サラワクの人々も自然環境も食べ物も、あの茶色く雄大な川も、流れゆく時間も全て好きですが「どうしてサラワクが好きなの?」と言われてもはっきりとした理由と答えが見つかりません。どうして故郷へ帰りたいの?と聞かれても家族や旧友に再会したりする以外、

特別、明確な理由はないと思います。今やサラワクは私にとって帰って落ち着ける故郷のような地になりました。ツアーでもなく観光でもなく何をしたいという大きな目的があるわけではありません。日本の現実的な世界から少し離れて、人間らしい生活をしているイバン族の人々と再会したり、自然に囲まれた環境で穏やかに流れゆく時間を過ごすことが、私がサラワクを何度も訪れる理由であり、また、これからも来たい理由でもあります。サラワク大好き!!!

## ラジャン川を上流へ・水辺の点描

中澤 和代

すでにご存知の方も多いかもしれないが、ラジャン川はサラワク州を流れる川で、インドネシアとの国境に端を登して南シナ海へ注ぐ。川の長さは約563kmで、マレーシアで最も長い川らしい。

2006年に現地団体を立ち上げる時、州政府に申請して許可をもらった団体名がRajang central zone Community Service association(略称RCS)であり、団体の名称は、ラジャン川と深い関わりがある。そして、RCSが運営する「Muhhibahセンター」は、この名前(RCS)が示すようにラジャン川のほぼ中流域に近い地域にある。

今年、国際ボランティア貯金の助成により始まった「Rajang Toy Boat Project」は、ラジャン川のもっと上流域(Sibuからスピードボートで3時間)の、そのまた支流や奥地の、交通手段がボートだけという川べりや、山中のロングハウスの障害児者にサービスを届けようとするプロジェクトであり、その拠点の街がKapit(カピット)という小さな街である。8年前から度々訪れているが、昨年は特に「Toy Boat Project」の準備のために何度も訪れた。今号は、ラジャン川の水辺の点描と人々の暮らしをご紹介します。

ラジャン川を航行するボートは地域の人々の貴重な移動手段である。何しろ、カピットに行くにはこのボートしかないのだから。シブの船着場からは、いろんな地域に行くスピードボートが出ていてカピット行きもその内の一つ。時速は40キロぐらい。ポーッ!と大きな汽笛を鳴らして、時間通りに出航。一つのボートに定員80人程度。人は船室に。人々が運ぶ大きな荷物は船体の上部に乗せる。移動手段が他にないという事情から特に上部に積む荷物は多い。各人が食物や衣類を大量に持ち帰る。業者も商用の品を運ぶ。船体上部には荷物整理要員がいて手際よく積荷を整理している。折しも、今年5月、カピットよりさらに上流で、同様のボートが転覆し、多くの人々が犠牲となった。未だに何人が行方不明になったのかかわからないそうだ。原因は水位が低いと

ころに定員オーバー。船体が深く沈み、スクリューが岩に激突、転覆したらしい。以来、乗船名簿が備えられている。私は乗船後、ライフジャケットの有無を確認するようになった。

ラジャン川は幅が広い。河川研究者の話では狭いところで400m、広いところでは1kmもあると言う。雄大な茶色の流れ、この色を私は「ミルクコーヒー色」と言い、ある人は「サラワクの大地の色」と表現する。ボートはハイスピードで進むが、兩岸に見えるのは、緑深い山脈のようなジャングル。時々、小さな船着場があり、その先には、必ずロングハウスがある。まれに木材の伐採場も見かける。

この流域で、嘗て日本人が大量の木を安価で伐採し、そこで働いた人々は、現金を得て立派なロングハウスをつくったと聞く。しかし、それは往年のこと。今は、一次林がなくなり、伐採が廃れて住人の収入は減少。働き手は出稼ぎに頼るしかない現実である。経済至上で海外進出した日本人。ほんとに途上国開発になったのか?と疑問も湧く。

途中で木材を運ぶ船や上流で採掘される石炭船にも出会う。2時間ひたすら水飛沫をあげて走ったボートは、Song(ソング)という小さな街で停船。流行の服装で故郷に帰った娘さんが、ボートを降りると、ハイヒールを片手に裸足で船着場に上がって行く。赤ちゃんを抱いて、出稼ぎ帰りの夫を迎えに来ている若い妻の姿。頭の上に卵がいっぱい入ったダンボール箱を乗せて歩く人もいる。さらに1時間、船は、ようやくカピットに着くのである。

カピットは、小さい街だが活気がある。何故か、若い人が多い。街の中心はザワザワ賑やか。車も多いが、道路がないから車で街外には出られない。道路をつくる計画が始まったらしいが、何年後になるのだろうか。街には何でもそろっている。病院、政府部局、図書館、個人店舗、レストラン、スーパー等々。夕方になるとたくさんある小さな食堂の前に、

炭火焼の肉や豆腐、野菜天ぷらなどの屋台が出て、煙と匂いが街をただよう。これが美味しい。街中を走っている車両の礼儀正しさにも感激。横断歩道で人を見かけると、車は必ず止まってくれる。マレーシアでは珍しい街だと思う。ただし物は少ない。買物に行っても目的の品物がないことの方が多い。お店の人でも平気で「それは多分、カピットにはないだろう」と答える。この街で見る多くの商品は「どうやって運ぶの?」という問いには「シブにはちゃんと船会社がある」と答えが返ってくる。

カピットは、ラジャン川沿いで3番目に大きい街だけれど、人口は?と聞いても「10万?20万?奥地からの出入りが頻繁なので、わからない、知らない」と言う。今までに知り合った人々は、カピットの街に誇りをもち、この街を愛している。歴史的にも白人王ブルック(イギリスの冒険家)の統治時代(19世紀)、先住民(首狩り族)との「Peace meeting(首狩りをやめる会議)」が行われたのは、有名な話。博物館には当時の写真と説明がある。この大河とその周辺には200年も遡る頃からの壮大なロマンがある。私には課題満載。そしてジャングルの奥へ奥へと人々の暮らしがある。不便の極みと思いきや、みんな明るく逞しい。

先日は目的のロングハウスに行くのに、この街から大河を小さいボートで30分。ボートを降りてアップダウンの道を約40分歩いた。その間にジャングルの中の澄んだ小川を三度、素足で渡りやっとな到着。寝たきりの女の子と青年に会った。この人たちに楽しさを!と思う。「Rajang Toy Boat Project」。このプロジェクトを含め、カピットの魅力とミッションに心が躍る。続きは次号で再び。



茶色の大河を走るスピードボート

## ACSだより

中澤 健

ベナンのACSも元気いっぱい!



2013アジア・バラアート出品の作品とアスニザ

最近のアイナさんからの情報のひとつ、アートの嬉しいニュースです。東京・池袋の東京芸術劇場展示ギャラリーで今年10月9日から13日まで開催される「2013アジア・バラアートTOKYO」(日本チャリティ協会主催)に、ACSのア

スニザとロスランの作品が出品されるということです。あの、本当に何かを自分からするということが難しかったロスランの作品が海を渡って公開展示されるなんて、



想像しただけで浮き浮きします。バラアートとは、障害をもつ人々による生きる証として生まれたアートのことを言うのだそうです。困難を超えて生まれたア

ート、海を渡った力作を時間のある方、東京付近の方、是非行ってみてください。

もう一つイベントに関するのですが、鳥取県のYMCA米子後援福祉専門学校が学開祭ポスターのデザインに、ACS Stepping stoneのバティックが選ばれたそうです。

学開祭は9月末だそうですが、私は何とかポスターを手に入れようと考えています。

その他では、First step centreでは昨年、中心スタッフが博士課程での勉強のために離れたり、内海さんのサバ行きなどで心配でしたが、幸運にも今年、何人かの有望な新人スタッフに恵まれたそうです。いずれにしろ全体的にスタッフの再編が急務になってきているベナンACSといえます。

街とは反対側にある「Stepping stone」は、高齢化と早期老化が現実課題です。そこへ最近、ダウン症の20代の3人の女性が仲間に加りました。作業場所を拡張したり組み替えたり、工夫して乗り切っている様子。

私は中々ベナンに行けません。10月にはアイナさんと明美さんがサラワクに来てくれる予定です。



## RCSはいま

中澤 和代

☆☆☆ 新メンバーとムヒバセンターの様子 ☆☆☆

新しく14歳の女の子が入った。これで、ムヒバセンターは、女性7人、男性11人、全部で18人になった。名前をDiana (ダイアナ) という。普通なら中学生であるが障害のためか、発育が悪く、体はかなり小さい。けれど大体のことはわかっていてよく話す。「おしゃべり!」とみんなに言われながら、楽しそうにそれを受け止めて、しゃべり続けている。

ムヒバセンターのスタッフも私たちも、メンバーひとり一人にどのような可能性があるか、どんなところに焦点を置くのか、ゴールは? など、毎週の会議で意見を出し合う。それが私たちのモチベーションにもなっている。

ダイアナは歩いて、しゃべれるが、てんかん発作があり、体が弱く、今のところ集中力がない。み

んな間違いなく変化するから、彼女のこれからも楽しみ。

前号で新人紹介をしたナターシャ (14歳女性) は、テレビ以外に興味がなく、どんなアプローチにも反応しなかった。ところが、半年過ぎた現在は、メンバーみんなと行動を共にしたいという意思力をもち、ドライバーが迎えに行くと、喜びの表現をするという。体の動かないナターシャを後輩と思うのか、6歳のキャサンドラ (女の子) がナターシャのよだれをふいてあげたりもする。

キャサンドラは昔で(4歳当時)人に噛みついたり、叩いたりするのを挨拶のようにしていたが、今ではすっかりその手段を忘れてしまったようである。

怒りっぽかったリティは薬の加減が合ってきたのか、発作もなく



左: 新メンバーダイアナ 右: キャサンドラ

笑顔の時が多くなった。また、調理スタッフを助けてかきかきしく動くことを役割と感じているようだし、それが彼女の誇りにもなっている。こうして、メンバーが、互いの相乗効果で和気あいあいと過ごす空間は、まさに響きのよいハーモニー(マレー語でMehhibeh)を奏でられる場になっている。

# じゃらんじゃらん ちやんがわん♪ (29回)

## 白いビーチはさかなのう○こ?! 上杉 誠

ボルネオの様な南の島に遊びに来たら、ぜひとも行きたくなるのが白い砂のビーチのリゾートです。青い空に白い砂浜、緑のヤシの木がそよぐ木陰でお昼寝なんて、最高の休暇になりそうです。そんな南の島の白い砂は、実はそのほとんどが魚が作り出している事をご存知でしょうか。

砂には色々な物が混ざって出来ています。貝がらの破片や極小の貝殻そのもの。星砂になる生き物の殻や小石など様々。もちろん南洋の海ならではのサンゴのかけらも混じっています。砂を作り出す材料のほとんどがこのサンゴのかけらなのですが自然の力だけではさらさらの細かい砂にはなれません。何と言ってもサンゴの殻は意外ともろいので、波の力だけでは砂になる前に無くなってしまいます。

では、どうやって細かい砂になっていくのでしょうか?そこで出てくるのがブダイという魚の仲間。漢字で書くと「不鱈」。不細工なタイと

いう意味ですね。その名が示しているのは、顔を見るとわかります。ものすごく出っ歯なんです。この出っ歯は、ものすごく堅くてサンゴや貝殻なんかをバリバリと砕くことが出来ます。その歯を使ってブダイの仲間たちはサンゴの表面をかじって食べています。サンゴは動物ですので、その表面には藻の混じった肉があります。それに加えて死んでしまったサンゴの表面には美味しい藻も生えています。元々草食系のブダイ達は、そんなおいしいご飯がいっぱいについているサンゴの表面をかじって食べるわけなんです。ところがその時にサンゴの殻までかじってしまいます。泳いでいると「ガリッポリッ」と音が聞こえるくらいの勢いで削り取っています。で、そのままサンゴの殻も食べてしまい、のどの奥にある第二の歯で細かく砕いて、最終的にサンゴの殻は細かい砂となって排出されます。それが何百年、何千年という時を経て溜まっていったのが、南の島の風景を作り出してい



カンムリブダイ

るんですね。という事は…。南の島の白い砂のビーチは、魚のウンコで出来ている訳で…。でもこの砂が生き物たちのすみかも作り出し、水の浄化もしてくれるおかげで、南洋の海は豊かになっているのです。

その豊かな恵みの一つがブダイ。顔はまずいですが、その身は白身でタンパクな味わい。刺身でよし、蒸しても良しのこのお魚、サラワクに来る機会があったらぜひとも試してみてくださいね。

*jalan jalan cari kawan* はマレー語で「友達を探しに行こう」の意味です。

### 北海道・札幌でACE地方会

11月4日(月)、札幌で地方会。「グループホームの出発から25年～今改めてグループホームと地域生活支援を考える～」が開催されます。現在、会場や日程の詳細等、光増先生、加藤先生等が中心となって現地で検討を進めています。感慨深いです。確かに来年は、知的障害者のグループホーム制度が出来て満25年です。時代はどう進んだのでしょうか。「家族や支援者でなく、本人」に焦点を当て、人間の幸せ、暖かい社会づくりに向かう会が出来たらと願っています。(中澤)

## ACEに入会のお誘い

### ★この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナンのACSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

### ★賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

### ★ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

## 編集後記

療養中の上杉誠さん、この頁のレギュラーの書き手ですが、体調やその後の様子をお伺いすると、まだまだ治療は続くけれど、体調の良い時は執筆に影響はないとのことで、今号から復活して下さることになりました。ありがとうございます。この頁を楽しみにして下さっている読者の方々と共に1日も早いご回復をお祈りいたしております。(Kazuyo)

首都 KLで、誰もが一緒に働けるパン屋さんを目指している享子さんが書いてくださった。苦境を乗り越えながら、願いを持ち続け行動し続ける、その意志とパワーに感動する。応援してます。頑張ってください!

「ACEだより」にも書きました。サラワク、シブの住所が変更になります。新住所は表記の通り。よろしくお願ひ致します。気持ち良い秋の訪れを祈っています。(Ken)